

通信小海

十年前の過ち

牧師 水草修治

一九九三年、日本の夏は寒かった。秋になると米が異例の大凶作で、平年作を百として作況指数は七十四。あどとき、政府はあわてて二百五十万トンの米を緊急輸入した。これは千二百五十万人分の年間米消費量にあたる。つまり東京の米消費量にあたる。

米は小麦とちがつて国際市場に出回る量が少ないが、米の輸入国は百を数える。これらは自然条件ゆえ自給できない国々がほとんどである。したがって、二百五十万トンの米を緊急で輸入すると、米の国際市場価格は跳ね上がった。実際、あの秋、日本の緊急輸入によってタイ米は二倍に、中国米は四倍の値段につり

「今月のみことば」
「自分のことだけでなく、他の人のことも顧みなさい。」ピリピ二：四

あげられてしまった。その結果、貧しい国々は米を十分確保できず、日本の二百五十万トンの米緊急輸入は、他の米輸入国への千二百五十万人の飢餓の輸出を意味したのだった。しかも、日本ではタイ米はまずいと言って、あちこちで捨てられていた。

あどとき、日本人は七十四パーセントの収穫でがまんして、「冗談でなく、うどんやパンを食べていればよかったのである。平和国家としての節を曲げてまで戦地に自衛隊員を送って強国にしつぽを振るばかりが国際貢献ではないだろう。弱い立場の国々の民をも顧みることである。

今年十年ぶりの冷夏で米の作況が気になり、八月中旬から三週間、教会では稲の開花 受粉のために暑い夏を送ってくださいと造り主である神様に祈った。主は祈りに答えて、盆を過ぎてから暑い夏を送ってください。今は、寒ければ寒いと文句を言い、暑

日本同盟基督教団 小海キリスト教会 牧師 水草修治
会堂・牧師館 長野県南佐久郡小海町大字小海四三三五 二七
千三八四一一 二二 二六七九二四七七六
郵便振替 五三 六一六八三

見晴台の教会へどうぞ

(小海駅東の丘の上)

地図

集会あんない

日曜日 サンデースクール 午前八時四五分

朝礼拝 午前十時から十一時半

夕礼拝 午後八時から九時

水曜日 祈り会 午前十時半と午後七時半

*海尻・川上でも毎月家庭集会あり。

*個人的な聖書勉強や個人的なご相談にも乗ります。

ければ暑いと不平を言う口を閉じて、「主よ、この厳しい残暑を感謝します」と祈る。

最近のニュースでは北海道、東北地方では凶作が予想されている。凶作となっても、安易な米輸入をして貧しい国々に飢餓を輸出するようなことがないように政府に願いたい。自国民ばかりでなく他国民にとっても、ほんとうにどういう選択が最善であるのかを国の指導者は考えて行動していただきたい。

「自分のことだけでなく他の人のことも顧みなさい。」ピリピ書二四

山谷にお米を

(連絡先)

お米と調味料(しょうゆ・塩だしのもと)、毛布を必要としています。大根・ニンジンなども助かります。

山谷農場事務局(藤田 寛)

電話090・1436・6634

フジカ042・700・2000

メール nyoro@beigeocn.ne.jp

カンパ: 千振替 一四・四五三七九六

(生活の知恵)

たまねぎの臭い

夏の間、たくさんの子供たちに食事を提供する松原湖バイブルキャンプのキッチンの子ーフから、うちの家内がふしぎで簡単な生活の知恵を教わってきました。

たくさんたまねぎを刻むと、手においが染み付いて水洗いでも取れなくなります。そんなときは、流しのステンレスの面に手をこすりつけましょう。あら不思議。あのいやなたまねぎの臭いが消えてしまいます。

なぜこんなことが起こるのか? こんど化学の先生に教わりたいと思いますが、とにかくあなたも実験してみてください。臭いが消える化学変化の仕組みは理解していかなくても、実際に、信じて手をステンレスにこすり付けばだれでも、臭いが消えます。信じることの効用について、ちょっと考えさせられます。

福音指圧教室

お元気でしょうか。涼しくなってきた、夏にたまった疲れが出る頃です。指圧を習って、おたがいに押しあいこしましょう。親子、兄弟、ご夫婦で見えれば、家でもし合うことができます。教えてくださるのは、「指圧の心、母心」で有名な波越学園卒業の専門の指圧の先生です。

日時九月二十八日(日)

午後二時から三時半

場所: 教会堂 電話九一・四七七六

持ち物 バスタオル、タオル、くつした

とにかく種を

蒔こう

「とにかく種を蒔いとけばいいに。」以前、畑を初めてしようとするとき、畑のおじいちゃんやおばあちゃんにあれこれ相談したら、よくこういふふうに教えられた。土をどうしようか、マルチをどうしようか、水はどんな具合に・・・いろいろとしなきゃならないことはあるだろうが、とにかくにも種を蒔くことが大事だ。種を蒔かないことには収穫はゼロだが、種さえ蒔いておけば、なにがしかは取れるというわけである。

「風を警戒している人は種を蒔かない。」と聖書にあるように、考え計画することは必要だが、考えすぎて時期を逃したるなにも取れない。とにかく、蒔いておけということであらう。

イエス様はしばしば、神のことは種にたとえている。「神の国は、人が地に種を蒔くようなもので、夜は寝て、朝は起き、そうこうしているうちに、種は芽を出します。どのようにしてか、人は知りません。地は人手によらず実をならせるもので、初めに苗、次に穂、次に穂の中に実が入ります。実が熟すると、人はすぐかまを入れます。収穫の時が来たからです。」(マルコ福音書四章)

種を蒔かないうちから、草取りはたいへんかなあ、雨は適量降るかなあ、日照りは大丈夫かなあ、霜はどうかなあ、鹿やウサギやイノシシの害はどうだろう・・・心配していたらきりが無い。もちろんプロならば冬場からの土作りなどももろの準備があるだろうが、しろつととしては、まずはカボチャの種を蒔いてみた。蒔いてみたら、芽が出たことを喜んで、それじゃあ草もちつと取るつかということになって、日照りが来たらバケツで水を運んで、つるが伸びたら隣の畑の人から「かぼちゃはそれは芽止めをするんだよ」と教わって、その通りやってみたりして、そうこうしているうちに、いつのまには花が咲き受粉して実がなった。

信仰も同じことで、心配ばかりしていても、人生には何も起こらない。「教会に行つて話は聞いてみたいけれど、クリスチャンになつたら親戚づきあいか近所付き合いとかどうなるかな」とか、「ちゃんと信じつつけられるのかな」とか、いろいろ心配して躊躇しているうちに、年を取ってしまったて、神様にお目にかかるそなえもいままに、あの世の法廷に引き出されるといふことになつてしまう。「風を警戒している人は種を蒔かず、雲を見ている人は刈り入れをしない。」という具合にして時を逸してしまえば、後悔してもなんにもならない。

「とにかく種をまいとけばいいに。」である。神様は生きてるので、とにかく教会に来て、イエス様を信じて心配事もゆだねて、こつこつとみことばを学んで行けば、あなたの人生にも豊かな実りと収穫の季節がやってくるのである。

「主の教えを喜びとし昼も夜もその教えを口ずさむ。その人は水路のそばに植わつた木のようにだ。時が来ると、実がなり、その葉は枯れない。その人は何をしても、栄える。」

ほんとうの男らしさ

「人は言った『あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。』創世記三十一

「夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも自分の妻を愛しなさい。・夫も自分の妻を自分のからだのように愛さなければなりません。自分の妻を愛する者は自分を愛しているのです。」エペソ書五：二五、二八

「男らしく強くありなさい。すべてのことを愛をもって行ないなさい。」聖書によれば、男らしいとは強いこと。しかも、その強さは、乱暴さではなく、己に死んですべてのことを愛をもって行なう強さなのでした。しかし、現実はその理想どおりにはいきません。最初の男、アダムが神様にそむいて善悪の知識の木

の実を取って食べて以来、男は「男らしさ」を失ってしまいました。

最初に木の実を食べたのは妻で、次に夫も妻の誘惑に乗って食べました。神様は夫を責任者として、また妻の保護者・指導者として認めていらしたので、妻を詰問する前に、まず夫を問い詰めました。ところが、夫アダムは自分の妻に責任を転嫁しました。「この女が私にくれたからですよ」と。

子どもが非行に走ると、「おまえの育て方が悪いからだ。おれのせいじゃない。」と妻を非難する夫は自分が墮落した男アダムの子孫であることを暴露しているのです。神様は、父親を子育ての責任者として立てていらつしやるのですから、それは責任転嫁というものです。「父たちよ。あなたがたも、子どもをいらだたせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。」(エペソ六：四)男らしさとは、このように取るべき責任を取ることです。夫が男らしく責任を取る人となるためには、奥さんも夫を家庭のリーダーとして敬い立てることが

助けになります。ですが、究極的には神の前に一人立つということが必要ですが。

男らしいとは強いことですが、その強さは、怒鳴ったりこぶしを挙げたりすることではなく、断固としてキリストの愛を行なう勇氣、自分の欲や感情に打ち勝つ自制力です。キリストの愛とは、神にそむいて罪を犯し続けている私たちのために十字架にいのちを捨てた愛ですから。

あるクリスチャンの老夫婦がいました。ある日、奥さんが難病だとわかり、医者夫婦を呼んでそのことを告知しました。今後出てくるであろう症状をくわしく説明されながら、奥さんは「ああ、どうしよう。こんなに詳しく聞いては、夫が私のことをわずらわしいと思うようになってしまつのではないかしら。」とたいへん心配をしました。ところが、医者説明が終わり、病院を出て、夫は妻の手を引いて道を歩きながらぼつりと言いました。「いっしょに生きていこうね。」奥さんは、ほんとうに嬉しかったのです。神様が求めておられるほんとうの男らしさとは、こういふことなのでしょう。